安芸教区
広島別院

70年法要に向けて

戦後70年。被爆地ヒロシマの思いを語り継ぐ安芸教区と広島別院（安部恵証教務所長・輪番／広島市中区寺町1―19）は、これまでの歩みに加え、さらなる非戦・平和への願いを込めて、7月3、4日に法要を営む。法要に向けて同教区は、「非戦・平和を願って70年」を統一テーマにした行事を行っているが、6月17日には、原爆孤児を受け入れた「童心寺」にスポットを当てた。

原爆孤児支援活動から平和を学ぶ

原爆孤児を物心両面で支えた浄土真宗本願寺派の僧侶・山下義信さん（1894～1989）。原爆が落とされた年の12月に私財を投じて広島市佐伯区の皆賀地区に広島戦災児育成所を作り、2年後には、子どもたちの心の依りどころとして、その施設の中に「童心寺」という寺院を創設した。

同寺では、子どもたちが「父の鐘　母の鐘」と呼ばれた喚鐘（かんしょう）の音と共に生活し、朝夕おつとめをしていた。僧侶になりたいと願う子どもを得度させ、宗門校の崇徳中学、高校、龍谷大学へと進学させたという。

この山下さんの活動と子どもたちへの思いを語り継いでいこうと、同地区の住民有志が今年2月、「童心寺を次世代に語りつぐ会」を結成。紙芝居「童心寺」を作り、子ども会や寺院で読み語りを行っている。その活動を知った僧侶や門信徒で組織する「甘露の会」が、多くの人に紙芝居をと「語りつぐ会」を招き6月17日、広島別院でイベントを開いた。

紙芝居を制作し上演したのは、同寺跡地の隣に暮らす木下数子さん(78)。1976年に引っ越してきた当所は伽藍（がらん）だけが残っていたという。寺のいわれを近所の人から聞き、山下さんの心に感銘を受けた木下さんは「原爆孤児のために尽くされた山下さんのことを書き残し、後世に伝え語り継ぐべきだと思った。しかし、宗旨が違う私がしてもいいのかとためらった」と振り返る。

戦後70年が近づき、世の中の動きを見た木下さんは「私ができることで伝え残そう」と紙芝居を思い立った。町内会長の久保田詳三さん（68、同市佐伯区・品正寺門徒総代）も全面協力。集会所に保管する童心寺の新聞記事などを提供した。

木下さんは、童心寺の設立から、そこで生活した子どもたちや親代わりとして働いた職員の様子などを30分のシナリオにまとめ、水彩画で16場面を描いた。また、久保田さんを通じて山下さんの長男・晃さん（84、同市中区在住）に協力を求め、監修してもらった。昨年3月に完成し、寺院の子ども会など20カ所ほどで読み語ってきたという。

イベントではモニターに絵を映し、山下さんと童心寺の子どもたちの気持ちを丁寧に伝えるように読み進めた木下さん（写真）。会場に訪れた150人は、子どもたちの苦労などに思いをはせた。

特別ゲストの晃さんは「父は厳しいところもあったが、仏教に根差した広い心を持っていたからか、とことん人のために尽くした人だった」と語る。久保田さんは「戦後70年が経ち、童心寺や育成所があったという歴史を知らない住民がほとんど。毎年の町内会の総会で、童心寺の話をするなど風化させないように努めたい。また、資料収集も行い、後世に伝え残す活動を続けたい」と話す。

育成所は67年に閉鎖され、童心寺は70年頃から「皆賀沖集会所」として使われたが、80年に本堂は解体され、現在に至っている。敷地の一角には「童心寺跡」の石碑が建てられ、桜の木が植えられている。集会所には喚鐘、鬼瓦、表札などが大切に保管されている。

7月3日 平和を願う法要（広島平和記念公園）

7月4日 全戦争死没者追悼法要
並びに原爆忌70周年法要（広島別院）

問い合わせは広島別院☎082（231）0302